

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、改変を加えた箇所があります。

私は、学生から、勉強してもどうせ忘れてしまうものをなぜ苦勞して勉強しなければならないか、とたずねられると、「それは知恵を身につけるためではないか」と答えることにしているのだ。(A)、学ぶことの中には知恵という、目に見えないが生きていく上に非常に大切なものがつくられていくと思うのである。この知恵がつくられる限り、学んだことを忘れることは人間の非とならない。学ぶことは、結果として^aムダにはならないのだ。だから大いに学び、大いに忘れ、また学びなさい、と私は答えることにしている。

では、いったい「知恵」とは何だろうか。それはきわめてあいまいなもので容易に分析し難いものだが、(B)、人間の中のどこにそれがつくられるかは、はっきりしている。

頭脳である。してみれば、知恵は人間の頭脳の仕組みと何らかの関係をもつものではないか、こんな推論ができそうな気がする。

人間の頭脳の特徴を明らかにするには、猿などの動物のそれと比べるより、(C) 頭脳をもった機械、コンピューターやロボットと比較するのが、一番てっとり早いと思う。

まず私は、ものを忘れることはコンピューターやロボットなどにはない人間特有の能力だ、と前に述べた。だが、実はそれは正確な言い方ではないのである。人間の頭脳には百四十億の神経細胞があつて、出来事や知識を無数に蓄積できるようになっているし、事実、蓄積されているのだ。ただコンピューターは記憶したことを自由自在に百パーセント取り出すことができるのに対して、人間の脳は、記憶したことをほんのわずかしかり出すことができない、という^bソウイにすぎない。ともあれ、脳に無数の情報を蓄積しているのは厳然とした事実なのである。つまり人間は「忘れる」のではなく、「脳に蓄積し取り出せない状態にする」能力をもつといったほうが正確な表現といえる。

私はこれを、コンピューターなどにはない、人間の脳のみが有する「ゆとり」だと思う。私がこの場合に使った「ゆとり」は数学的な意味での「ゆとり」である。すなわち、わずかしかない「いつでもすぐ取り出せる」情報に対比して、実は膨大な量の情報が「すぐ取り出せない」形で脳に蓄積されているという、後者の前者に対する比率の大きさを「ゆとり」ということにしている。

① 人間の頭脳にあるこの「ゆとり」が、実は知恵というものをつくる要素の一つなのだ。

ここで一つの例をあげる。今かりに、ある文科系の大学生が卒業論文を書く上で、どうしても高校生の頃に習った数学の因数分解を用いなければならぬ必要が生じたとする。(D)、彼は文科系の学問ばかりしてきたために、いつのまにかすっかり数学の因数分解を忘れてしまっている。どうするか。彼はおそらく図書館に直行して調べるか、理科系の友人にたずねてみるか、何らかの手段を講じるにちがいない。そして、そのようにちよつとした^IIをとった彼は、すぐに「ああ、なるほど」とうなずくことができるにちがいない。なぜかというところ、彼の頭の中には高校時代に習った因数分解の基礎的な知識が蓄積され眠っているからだ。それゆえ、一度も数学を勉強したことのない人ならば理解するのに長い時間と労力を要するところを、彼は短時間でさほど苦勞せずに理解できるのである。

このように、頭脳に蓄積され取り出せない状態にされていた知識は、永遠に取り出せないものではなく、ちよつとした手間ときっかけをつくれれば、容易に取り出すことができるのだ。人間の頭脳に「ゆとり」があるからこそ、それが可能なのである。

知恵とは、一つはこのような側面をもつたものだと思う。私はこれを「知恵の広さ」と呼ぶことにしている。この「知恵の広さ」は勉強しては忘れ、また勉強しては忘れていくうちに、自然と脳の中につちかわれていくのである。

知恵がつくられる場所である人間の頭脳は、また、コンピューターなどどちがつて、物事を幅をもつてみつめ、考えることができるようになってきている。つまり寛容な思考態度をとることが人間にはできるのである。

例えば、コンピューターに映画を見させても、彼は鑑賞することができない。(E)、一つ一つのコマがバラバラな画面に見え、そこにある連続した動きがコンピューターには見えないからだ。ところが人間は、一つのコマを見てイメージをはっきり残し、次のコマへ移るまでのきわめて短い間を無視し、前のコマのイメージを持続させて次のコマのイメージと重ねることができている。これは人間の脳がある時は敏感に働き、ある時は鈍感に働き、また刺激に対する反応の^cヨインを残すという特性をもっているからだが、ともかくも、人間はそのような不連続なものから連続したものを読みとる能力をもっているのだ。

人間の頭脳にあるこの寛容性は、ものを考える上でも^dハッキされる。その一つは連想である。

文章、特に詩とか格言のようなものを読む時、その中の言葉から連想される異なった言葉を、思いつくまま列記しておくとする。列記された言葉のいくつかを組み合わせて新しい文章をつくってみる。^eこうしたあとで、もう一度、元の文章を読み直すと、意味の理解が深みと新鮮さをもつものだ。連想は、言葉の意味と感じに幅をもたせてみるという脳の寛容性から生まれる。

また連想の習慣は、いくつかの異なるものの中に共通点を読みとる脳の働きにもつながる。数学の簡単な例でいうと、円と三角形の共通点は、平面を内側と外側の二つに分割するという性質である。ユの字には、この性質はない。8の字は、平面を三つに分割する。実際生活でも、議論をまとめる時に、^f異なった意見の共通点を発見する能力は大変有用である。

このように、人がものを考える時は幅をもった考え方をするものであり、またそれでこそ、^g思考は発展性をもつて深まってくのだ。

私は、人生には深くものを考えなければならぬ時期があり、その深い思考力をつちかうことも勉強の目的の一つだ、と前にいった。これはいいかえれば、勉強してこそつくられる「知恵の深さ」である。勉強しない人の頭脳は、人間特有の幅をもった思考のレッスンをしないか

ら深くものを考える力、つまり「知恵の深さ」が身につかないのだ。

知恵には「広さ」があり、「深さ」があり、また「強さ」というものがある。「知恵の強さ」とは、すなわち決断力である。

私たちが人生で当面する問題には、クイズやテストのようにあらかじめ答えが用意されているものはない。クイズの問題は解答を見つけるだけの問題だが、人生の問題は、相当の時間をかけなければ問題そのものの真意もつかめないし、到底真の解決に至らない難問ばかりである。だから、^⑤長い年月をかけて、すべてを知らなければ何の行動も起こせないという姿勢にだけ固執しては、この世は渡っていけない。医者が、現在の医学の^e「スライジュン」ではある病気について数パーセントしか解明されていなくても、目の前で苦しんでいる患者に何らかの診断をくださなければならぬ時があるように、それがいかに未解決の難問であろうと、どこかで決断しなければならぬのである。飛躍しなければならぬのである。

人間の頭脳は、不連続のものから連続したものを導き出す寛容性をもっている、と私はいった。いいかえれば、実は飛躍であることを飛躍でないにとらえられるのが、人間の脳である。だから、人間は飛躍ができる。コンピューターやロボットには、それができない。

決断できる力、どこかでエイツと飛躍できる力。知恵のそういう「強さ」も、人生とは直接かわらないように見える。IIを積み上げていく中で、身についていくものなのだ。

知恵には、以上私が述べたほかにもいくつかの側面があるはずだ。いずれにせよ私は、「人はなぜ学ばなければならないか」の答えがあるとすれば、「それは知恵を身につけるためだ」と、答えるほかないのである。

(広中平祐『学問の発見』講談社)

問一 a e のカタカナを漢字に直さない。

問二 (A) (E) に入る最も適切な言葉を次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ言葉を二度以上使ってはけません。

ア ところが イ つまり ウ やはり エ また オ ただし カ なぜなら

問三 I に入る適切な漢字一字を同じ形式段落の中から抜き出しなさい。

問四 II に入る適切な漢字二字の言葉を本文中から抜き出しなさい。

問五 線部①で言う頭脳の「ゆとり」によって作り出される知恵とはどういう能力か、説明しなさい。

問六 線部②のように言えるのはなぜか、その理由を説明しなさい。

問七 線部③の「能力」は、脳の持つどういう性質から生み出されるのか、本文中より二十五字で抜き出しなさい。

問八 線部④のように言える理由として、最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア コンピューターは不連続なものから連続を読み取ることは苦手だが、その情報処理能力の高さを人間は活用することで、不連続から連続に飛躍させて考えを深めていけるから。

イ コンピューターの情報処理能力は、人間の頭脳の及ぶところではなく、人間はコンピューターからもたらされる新たな考え方を頼りに連想を広げ、それがさらに新しい考えを生み出すから。

ウ コンピューターは情報を再現することしかできないが、人間の頭脳は幅をもった見方ができ、人々の異なる考えから共通点を見つけ、て全てを受け入れ、それを自分の考えに還元できるから。

エ コンピューターは様々な情報を組み合わせる複雑な考えを可能にするが、人間は忘れる能力を使うことで、論理性を超越した一見矛盾している思考にまで飛躍していけるから。

オ コンピューターは与えられた情報から引き出された答えしか出てこないが、人間の頭脳は与えられた情報以外の情報を連想することによって新たな考え方を生み出すことも可能であるから。

問九 線部⑤のように言う筆者は、結局どういことが言いたいのか、説明しなさい。



次の文章は江戸時代の国学者本居宣長の著書『玉勝間』の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

古いにしへよりも後世のまされること、よろづの物にも、事にも多し。その一つをいはむに、古は、橘たちばなをならびなき物にしてめでつるを、近き世には、みかんといふ物ありて、このみかんにくらぶれば、橘は①数にもあらずけおされたり。その外かうじ、ゆ、くねんぼ、だいくなどのたぐひ多き中に、みかんぞ味ことにすぐれて、中にも橘によく似てこよなくまされる物なり。②この一つにておしはかるべし。或は古にはなくて、今はある物も多く、古はわろくて、今のはA たぐひ多し。これをもて思へば、今より後も又いかにあらむ、今にB 物多く出で来べし。今の心にて思へば、古はよろづに事たらずあかぬ事多かりけむ。C その世には、③さはおぼえずやありけむ、今より後また、物の多くよきが出で来む世には、④今をも ⑤しか思ふべけれど、今の人、事たらずとはおぼえぬがごとし。

*注 かうじ・ゆ・くねんぼ・だいく＝柑橘類の各種。

問一 — A C に入る適切な言葉を答えなさい。ただし文脈に留意して、A・B は本文中から抜き出しなさい。また C は次のア～オから最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア ゆゑに イ さは ウ もし エ たとひ オ されど

問二 — 線部①の意味を答えなさい。

問三 — 線部②について、
(1) 「この一つ」とはどのようなことか、説明しなさい。

(2) 何を「おしはかるべし」なのか、説明しなさい。

問四 — 線部③、⑤の指示内容として共通する適切な言葉を、本文中から五字以内で抜き出しなさい。

問五 — 線部④で「今をも」と表現されている「今」とはどのような「今」のことか、説明しなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。設問の都合上、訓点を省いた箇所があります。

司馬遷は『史記』の中で漢の時代の將軍・李広（李將軍）をたたえている。

* 太史公曰、「* 伝曰、『其身正、不令而行、^①其身

不^レ正、雖^レ令不^レ従。』其李將軍之謂乎。余^②睹^ニ李將軍

* 悛悛如^ニ* 鄙人^③* 口不能道辞。及^ニ死之日、天下知^レ与^レ

不^レ知、皆為^レ尽^レ哀。彼其忠実心、誠^④信^ニ於^ニ* 士大夫^⑤也。

諺曰、『^④桃李不^レ言、下自成^レ蹊。』此言雖^レ小、可^ニ以

諭^一大也。』

*注 太史公＝歴史・記録をつかさどる太史の敬称。特に司馬遷をいう。 伝＝ここでは『論語』の子路編をさす。

悛悛＝慎み深くまじめ。 鄙人＝田舎者。 口不能道辞＝口べたであった。 士大夫＝部下たちのこと。

問一 —— 線部①の現代語訳を答えなさい。

問二 —— 線部②は「口道辞する能はず」と読む。この読みに従って返り点を施しなさい。

問三 —— 線部③を書き下し文にしなさい。

問四 —— 線部④について、

(1) 「桃李」がたとえているものを、本文中から抜き出して答えなさい。

(2) この言葉はどのようなたとえとして用いられているか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 徳がある人物には自然と人々が集まってくるということ。

イ 徳のない人物からは人々が離れていくということ。

ウ 権力者の前では自然と人々が道をあけるといこと。

エ 権力者の下では自然と人々が統制されていくということ。

オ 権力者の指令がなくても人々は察して行動するということ。

(3) 「李」を用いたことわざとして「李下に冠を正さず」もあるが、その意味を答えなさい。

国語 解答用紙 (その一)

—

問一

d	a
e	b
	c

問二

A
B
C
D
E

問三

--

問四

問五

問六

得	点

受験 番号	
----------	--

問七

問八

--

問九

国語 解答用紙 (その二)

二

問一

A
B
C

問二

--

問三

(1)

(2)

(2)

問四

問五

三

問一

問二

口 不 能 道 辞

問三

--

問四

(1)

(2)

(2)

(3)

(3)

受験
番号

--